

AEFA 設立 20 周年を迎えて

おかげさまで、AEFA は設立から 20 周年を迎えることができました。さまざまなかたちで AEFA を支え続けてくださったお一人おひとりに心から感謝を申し上げます。

今号は私たちの 20 年間の思いを込めた会報です。ゆっくり、時間をかけて読んでいただけると嬉しいです。

巻頭特集では 20 年の活動を振り返りました。設立当初と比べればそれぞれの国々の経済は発展し、生活水準もずいぶん上がったように見えます。しかし、山岳少数民族の子どもたちが置かれた環境にはまだまだ問題が残っていますし、むしろ、時代の変遷によって深刻化している面もあるように感じます。現地の事情に応じて私たちの取り組みも少しずつ変わってきました。これからも、現地の事情をよく踏まえながら、AEFA だからこそできることにこだわり、活動していきたいと思ひます。

ベトナム在住の AEFA 理事の坪井さんのコラムは現地に暮らしているからこそ見える話です。『地上で僕らはつかの間きらめく』はおすすめです。

コロナ禍が明けて、NGO パートナーに来日していただけるようになりました。スリランカのダヤシリさんとは、国

家財政破綻後の厳しいインフレ下での支援のあり方についてじっくりお話することができました。7 月にはベトナムからアインさんたちをお迎えして、東京・山形でフォーラムとワークショップを開催します。現地の課題をみんなで共有して、次の活動の糧にできればと考えています。

AEFA の学校を卒業した子どもたちがいろいろな場所で活躍する姿に接しています。地に足が付いた着実な成果にこだわり続けてきたからこそです。丁寧に、地道に、思いを込めて、これからも一步一步、歩みを進めていきます。

それぞれの記事のご感想やご意見も励みになります。フレンド会報は支えてくださる皆さまと AEFA の間のお手紙です。引き続きどうぞ宜しくお願い致します。



スリランカのパートナー、ダヤシリさんと

AEFA マンスリースポーター

募集中

AEFA の活動を継続的に支援して下さる「マンスリースポーター」を募集しています。サポーターの皆様からのご寄付は、アジア山岳少数民族の子どもたちの可能性をひらく教育支援プログラムのために活用させていただきます。

金額（毎月）

月額 1,000 円（1 口）から 5,000 円（5 口）まで選択できます。

また、児童・学生の方々も参加しやすいように月額 500 円のプログラムも設定しました。

登録方法

寄付プラットフォームとして実績ある「Syncable」を使用しています。クレジットカード決済が可能です。

1. 右下の QR コードを読み取り、Syncable の AEFA ページにアクセスしてください。
2. 「支援方法」より、「寄付する」を選択してください。
3. 「頻度」の欄で「毎月」を選び、「金額」の欄で月額を選択してください。
4. クレジット決済に必要な情報を入力してください。
5. 登録いただいたメールアドレスに Syncable からのメールが届きましたら受付の完了です。



<https://syncable.biz/>

Q 「アジア教育友好協会」で検索



個人と非営利団体を繋ぐプラットフォームサービス
Syncable（シンカブル）に登録しました



<https://syncable.biz/>

Q 「アジア教育友好協会」で検索

当サイト経由で AEFA 会費・寄付のカード決済ができます

AEFA Web & SNS

Web Site



Facebook



Instagram



私たちは各国のパートナー NGO と
手を携えて活動しています。

ベトナム：Research & Communication Centre for Sustainable Development (CSD)
ラオス：Association for Community Development (ACD)
タイ：Raks Thai Foundation (CARE Thailand)
スリランカ：Rotary Club of Colombo (RCC)



AEFA フレンド会報

37号

2024 年 7 月 1 日



特集

AEFA20 周年「教育」を通じて希望を紡ぐ
奥地の子どもたちの環境と緊急課題
ベトナム遠景・近景ーオーシャンとの出会いから考える



AEFA アジア教育友好協会
Asian Education and Friendship Association

〒102-0074 東京都千代田区九段南 2-3-22 アーバンセカンドビル 3F TEL : 03-6265-6490 FAX : 03-6265-6491

「教育」を通じて希望を紡ぐ

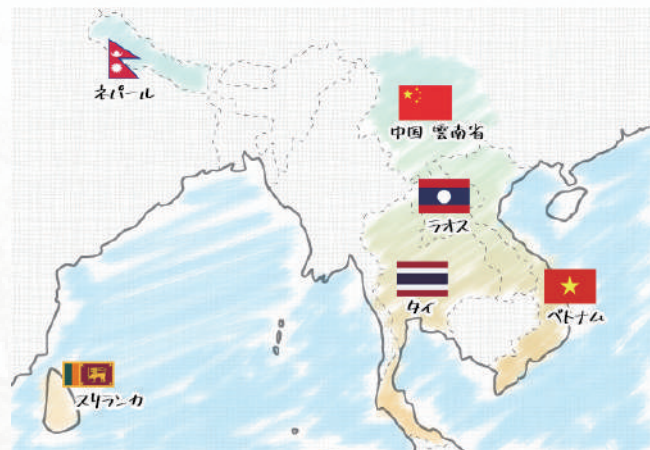
～ 日本の子どもたちの未来のパートナーとともに ～

「アジアで学校を何百校も建設しているというから、もっと大きな事務所だろうと思っていました！」

私たちの事務所を初めて訪れた方からたびたびお聞きする驚きの声です。

私たちアジア教育友好協会（AEFA: Asian Education and Friendship Association, 略して"アエファ"）はコンパクトな組織です。小さな事務所で多くのプロジェクトを形にしています。対象はアジア山岳地帯の少数民族や貧困地帯の多い農村地帯の子どもたち、そして難民の子どもたち。最も弱く困難な立場にある子どもたちのために学校建設や教育支援プロジェクトを行っています。

政府や自治体の手も届かない奥地での学校建設のほか、井戸やトイレ建設により衛生環境を改善したり、図書館を作ったり。また、教員志望の若者たちを奨学金で援助することや、学校の先生の生活を援助することもあります。すべては子どもたちに学びの場を提供し、学びの質を向上させ、未来への道を拓くためです。



今から20年前の2004年、AEFAの活動は始まりました。ベトナムやラオスの山岳地帯には、さまざまな事情で多くの少数民族が独自の言語や文化を守りながら暮らしています。長く続いた戦争の影響も残っています。その生活は厳しく、平均年収が日本円で2万円程度という村も珍しくありません。公用語を理解できないため就労機会も限られています。

学校がない村も多く、町の学校に通学できたとしても、公用語を習得していない少数民族の子どもたちにとってはいきなり外国語で授業を受けるようなもの。学習内容を理解することは困難です。教育の大切さに対する大人たちの理解もまだまだで、中学校まで進むことのできる生徒はわ



ずかです。山岳少数民族の子どもたちの未来には、大人たちと同様にごく限られた選択肢しかありません。

幾世代にもわたり経済的困難や社会的不利益に苦しむ山岳少数民族のために何かしたい、まずは子どもたちの教育環境を整えよう、という思いからAEFAの活動は始まりました。20年の間に活動内容は時代の要求に合わせて変化してきましたが、「子どもが中心」「教育が基本」という信念は今も変わることなくAEFAの基礎となっています。



人と村が成長する仕組みを大切に

AEFA 創設当初は学校建設をメイン事業として活動を進めました。ベトナム、ラオス、タイ、スリランカなどアジアの国々で建設した学校は335校（2023年12月末時点）にのびります。

AEFAの学校建設は、まず村人たちとの話し合いから始まります。一方的な善意の押し付けはしません。村人たちが自身が「自分たちの学校」を誇りに思い、学校とともに村が成長していく道を探りながら、納得のいくまで話し合いを交わします。

振り返れば、一村・一校それぞれに忘れられない思い出



があります。道なき道を分け入って山奥の村にたどり着いたこと、現地での話し合いが思うように進まず悩んだこと、村人たちが総出で学校建設敷地を整地してくれたこと、できるかぎりの資材を集めてくれて感激したこと。しかし、何より印象深いのは「人々の変化」です。

言葉のコンプレックスから人前で話すことができなかった少数民族の子どもたちが、学校に通ううちに次第に自信をもって発言するようになった。笑顔が増え、学校が好き、学校に行くのが楽しいと言うようになった。先生の真似をしてみんなで同じ絵ばかりだったのが、それぞれに異なる素敵な絵を描くようになった。勉強するより畑仕事の手伝いをしろ、と言っていた親たちが、お金を出し合って学校の壁を塗り替えるなど学習環境の整備をするようになった…学びの場が子どもたちの笑顔を生み、子どもたちの輝きが大人たちを変えているという報告を聞くと、私たちは深い幸せを感じます。

AEFAの活動の特徴は現地の子どもたち・村人たちの小さな変化を大切にしていることです。大金をかけて手取り早く目に見える成果を出すのではなく、手間暇かけて丁寧に、小さくても価値のある変化を現地の人々と一緒に作っていく。それがAEFAの方針です。

一方で、現地の人々および日本の私たちを取り巻く環境は過去10年間（特にこの5年間）に急激に変化しました。現地のニーズおよびAEFAの活動内容にもさまざまな変化がありました。

学校建設のその先へ

村に学校ができても、生まれて初めての集団社会で委縮してしまう子どもたちもいます。そこで生まれたのが「お兄ちゃん・お姉ちゃん先生」です。村の学校に通っている年長の子どもたちが、これから学校に通う幼い子どもたちに一つひとつの言葉やお絵描きなどいろいろ教えてくれるこ

とで、幼い子どもたちが学校は楽しいところ、行ってみたいところと考えるようになるプログラムです。学校に慣れるので、集団生活の戸惑いも小さくなります。なにより、お兄さんやお姉さんたちのリーダーシップを引き出します。

少数民族の子どもたちにとって公用語も高いハードルのひとつです。固有の民族言語を話せる先生がいれば、子どもたちが授業から脱落することの防止につながります。そこで、民族出身の若者が教員となって活躍することを目指した「教員養成奨学金」プログラムがラオスで始まりました。

教員養成奨学金は、村の若者たちに未来の可能性を開くものでもあります。初等教育を完了したその先に夢の選択肢があり、その夢を実現できるということが「教育」への信頼となります。近年は教員養成に限らず、職業訓練校に進学する若者たちも奨学金の対象としています。奨学金を得て、教員のほか大工や電気技師、車やバイクの修理工として活躍している若者たち、ファイナンシャル・IT・医療分野での活躍を目指して進学した若者たちがいます。2023年にはAEFA奨学金を得た少数民族の若者から初めての校長先生が誕生しました。

知識が未来を作る

「図書館プロジェクト」は、近年急速に発展したプロジェクトのひとつです。ベトナムとラオスで32館の図書館（2023年末）を建設し、同時に本に関わる教育プログラムを実施してきました。

AEFAが支援している地域は、日本の学校とは異なりいつでも学校で本が読めるという環境ではありません。村の生活しか知らない子どもたちに本を通じて新しい世界を知ってもらおう、このプロジェクトではさまざまなプログラムを実施しています。図書館の建設や本の寄贈はもちろん、ベトナムでは小学生への本の読み聞かせや、本の内容をテーマにした演劇などにも取り組みます。ラオスでは中学生によ

る自主的運営によって、彼ら自身の居場所としての価値も見えてきました。本を通じて世界を知ること、子どもたちの将来の仕事に対するイメージも膨らみます。

このほか、山奥の村から一度も出たことのない子どもたちのために「遠足プログラム」も実施してきました。

子どもたちの視野を拓げ、考える力を養うためのこれらのプロジェクトを通じて、子どもたちが以前より熱心に学習するようになった・将来の夢を語るようになったという報告が寄せられています。

経済発展の影

近年経済発展の著しいアジアの国々において、貧富の格差は広がり、現地の課題はより見えづらいものになっています。たしかに、20 年前と比べてそれぞれの国の経済は大きなものになりました。しかし、日本からのフライト乗り換えで訪れる大都市と比べて格差はより大きくなったと実感しています。

日本と同様、新型コロナは現地に大きな影響を与えました。地理的移動が制限されたことにより労働収入を失った人々も多く、生活基盤が脅かされた時期もありました。そのコロナ禍が落ち着いた今、どの地域でも急激なインフレ・物資不足・気候変動が重なって山岳少数民族の生活はさらに厳しくなっています。たとえばラオスでは“まず食べていくことが必要”と、親や先生、生徒たち（特に高校生男子）までが出稼ぎや労働に出ています。幼い子どもたちは孤独な環境に置かれています。

また、経済発展に伴い開発が進み、道路や交通網が整備され、ドラッグや人身売買など悪いものも山奥に流入してくるようになりました。土地や労働力搾取、薬害、性被害等が大きな課題となっています。

このような問題を背景に、学校が持つ意味も変化しました。子どもたちの心のケア、子どもたちの安全や人権を守るための教育が必要になりました。現地 NGO からさまざまなプロジェクトが提案され、AEFA は日本の支援者とともにそのプロジェクトに携わってきています。また、現地 NGO の提案から多くのことを学んでいます。

子どもを中心とした多彩なプロジェクト

山岳地帯の子どもたちはその国の平均と比較して成長不足だという報告があります。経済的理由や知識不足から、食事の栄養が足りない、栄養バランスが偏っているという理由が考えられています。そこでラオスでは、子どもたちが基本的な栄養の知識や、栄養価を効果的に摂取する調



理法、衛生管理について学び、それを幼い子どもたちに教える「リトルシェフ」栄養改善プロジェクトが導入されました。

環境プロジェクト (EES: Environmental Education at School in southern Laos) は、村の中学生が小学校児童や村人に環境意識を啓蒙するプロジェクトです。生活にプラスチック製品が増え、不適切なゴミ処理による環境・健康リスクが懸念されている中、子どもたちがリーダーとなって環境問題やごみ処理の正しい知識を伝え、行動します。この活動を通じて、子どもたちが主体的に行動する力や、人前で自分の意見を発言・発表する自信などを身に着けることが大きな目的となっています。



ラオスでは村の生活と衛生環境のために、学校に井戸＋水タンク＋浄水器を設置する「水プロジェクト」を推進しています。村人たちは学校で水を安く買うことができ、学校は水の代金で学校の備品などを購入できるようになります。

政府方針の転換・経済危機

2022 年、ベトナム政府は山岳地域にある分校を本校に統合するとの方針を打ち出しました。実際、小さな子どもたちが親から離れて寄宿舎に泊まる学校も出てきています。統合された分校の子どもたちにとって、大きな学校でたくさんのクラスメートと学ぶ意義はもちろんありますが、村と遠く離れた本校との間を毎週末に往復する負担、通学路の安全、教室や寄宿舎の不足、親から離れて寄宿舎で平日を暮らす幼い子どもたちの心の問題等、多くの課題に対応していかなければなりません。一方で、地域事情に応じて今でも分校を続けるところもあります。地域それぞれの事情をよく聞き、長い目で見て子どもたちのためになるのは何か、これまで以上に現地の人たちとよく話し合っ

てプロジェクトを進めていかなければなりません。スリランカでは経済危機、物価高騰、政治的混乱のために、予定していた建設プロジェクトに着手できない状況が続きました。経済危機は今も続いており、学校や教室の整備にまでは政府の資金が回らない状況です。

このように現地状況が刻々と変わる中で AEFA が現地の最新課題を把握しニーズに合わせて活動できるのは、現地 NGO のおかげです。ベトナムでは CSD (Children-School Development)、ラオスでは ACD (Association for Community Development)、タイでは RTF (Raks Thai Foundation)、スリランカではロンボロータリークラブと協力して活動を行っています。

現地事情は日本の私たちが想像する以上に複雑で繊細です。現地の時間の進み方と日本の時間の進み方は異なります。ものごとの進め方も異なります。何か月もかけて現地との調整が必要で、急の変更はほぼ不可能です。外国人の訪問許可を取ることが難しい地区もあります。現地の課題、そして、ニーズは多様化・複雑化しており、かつ、現地政府の方針が変わり、先生が替わり、役人が替わり、過去にできたことも突然できなくなってしまうこともあります。現地 NGO でさえ苦労しながら活動を行っています。AEFA の活動は、現地 NGO の情熱と地道な努力の上に成り立っています。

円安ショック

日本の状況も変わりました。大きな変化の一つが 2023 年、2024 年に急激に進んだ円安です。2021 年には 110 円前後だった為替レートが、一気に 150 円を超えました。

また、コロナ後の急激なインフレは深刻で、ベトナムでもラオスでも建設費用は大きくなる一方です。そこに近年の円安が加わって、これまでの予算感・規模感では学校建設が難しくなっています。

学びの質の向上や、学びの先のサポートなど、やるべきことは尽きません。教育は継続してこそ価値があります。継続のために何ができるか、何をすべきか、答えを探りつつ活動をしています。

新しい「交流」の窓

20 年前、日本の子どもたちにとってベトナムやラオスの子どもたちは遠い国の、自分たちとは異なる生活を送っている子どもたちでした。AEFA は日本の子どもたちに“アジアの山岳少数民族の子どもたちの生活を知ってもらおう”と、建設校と日本の学校との交流事業を行ってきました。しかし 20 年後の今、日本の状況は変わりました。アジアの国々から日本へ働きに来ている人たちや留学生たちが身近にいます。日本が好きで、日本のことをもっと知りたくて、日本語を勉強しながら頑張っている人がたくさんいます。身近に暮らす留学生や技能実習生を通してその人たちの母国を理解する取り組みも、少しずつ進めています。

山形で活動する団体との協働も始まっています。山形在留外国人の方々和我们日本人が共生する上でのこれからの課題に焦点を当てて活動している、山形県青年国際交流機構や More Smile Yamagata 在山形ベトナム人協会の皆さんです。7 月 14 日にはベトナムから招聘した CSD の皆さんと一緒に山形市で国際交流ワークショップを開催します。

隣人としての視点

今や日本の私たちは、社会の隣人としてアジアの国々の人たちとともに生きる時代を迎えています。また AEFA が



取り組んできた課題 - たとえば学校の統廃合、学校に行けない子どもたちの限られた未来、経済的困難、都市と過疎地域の差、マイノリティとして生きることの難しさなど - も私たち日本人にとって遠い国の話ではなく身近にある問題となりました。背景は異なれど、直面する困難や心の痛みは私たちに共通するものではないでしょうか。

どのような状況にあっても子どもたちは私たちの希望です。子どもたちが社会に居場所をもち、学ぶことが楽しいと思えるなら、子どもたちの未来はきっと明るい。それは日本の子どもも他のアジアの国々の子どもも同じです。

日本の子どもたちにとってアジアの国々の子どもたちは未来のパートナーです。近い将来、若者たちが国を超えて、共に勉強したり働いたりする時代が来るでしょう。彼らが学ぶ喜びでつながり、また次の世代へとその喜びをつなげていく場を作り続けることが、AEFA の使命と考えています。

言葉も文化も違う現地の人々、現地 NGO、日本の支援者の皆さん、そして AEFA は、子どもの未来と教育の力を信じることでつながっています。世界が大きく揺れ動き厳しい現実の風が吹き荒れる中で、たとえ細くてもたくさんの草の根がつながりあいしっかりと社会の土台を支える、そんな活動を続けていきたいと考えています。



現地で、いま起きていること

奥地の子どもたちの環境と緊急課題

昨秋以降、AEFA プロジェクトにおけるアジアの現地訪問が本格的に再開しました。コロナ禍に竣工した学校や図書館の贈呈式や交流会に参加できるようになり、現地の様子をリアルに実感しています。また、アクセスが非常に難しい奥地を訪問し、厳しい現実も目の当たりにしました。誰の手も届かない奥地で学びの場を必要としている子どもたちのために、学校建設が急務です。

ベトナムでは、2023 年 11 月に北中部タインホア省のラオス国境に近い山岳部、モン族やタイ族の子どもたちが学ぶ村の小さな分校を訪れました。本校まで何キロもある山道を歩いて通うことは困難で、さりとて本校で寄宿生活を送ろうにもそのための施設が整っているわけではありません。村に学校があることで、子どもたちは学びを続けることができています。

「フレンド会報 34 号」でベトナム政府の方針転換（分校を本校に統廃合していく）についてご報告しましたが、ベトナムの全ての分校が本校に統合されその役割を失う…というわけではありません。タインホア省のように、地理的に他の学校へ通うことが難しい地域では村の分校が存続します。AEFA はこれからもそれぞれの地域ニーズに合わせた分校建設支援を行っていきます。

2022 年から反腐敗運動により中央政府、地方行政における幹部の辞職と、それに伴う行政手続きの遅れが続いています。現時点では、建設プロジェクトの許認可に約 9 か月かかり、ご支援の決定から約 1 年で竣工に至っています。引き続き、行政手続きを含め最新の現地状況を確認しつつ進捗管理を続けます。

スリランカでは、コロナ禍の間に竣工した学校への訪問（学校建設支援者とともに）を今秋より再開する予定です。また、現地パートナーのコロンボロータリークラブからエンジニア・建築家のメンバーが学校建設プロジェクト

に積極的に参画してくれることになりました。物価高騰や円安が続く中、費用を圧縮するための力強いパートナーを得ることができました。教室増設を必要としている候補校への支援をぜひ実現したいと考えています。

ラオスでは、通貨安・物価高騰を背景に井戸や浄水器へのニーズが増加しています。学校で飲料水を作れば、村人は学校から飲料水を安く購入でき、村人の生活にも子どもたちの衛生にも役立ちます。同プロジェクトには現地 NGO からの強い支援要望が寄せられています。

また、今年はサラワン県サムアイ郡のベトナム国境に近い山のとっぺんにあるラロ村に学校をつくります。ラロ村で暮らす少数民族パコ族の子どもたちは、板囲いの仮小屋を校舎として勉強しています。雨季には川の増水や道のぬかるみによりラロ村の外に出ることができません。パコ族の子どもたちが村の学校で学び続ける環境を整えるために、学校建設が急務となっています。

世界情勢が生む格差や分断、物価高騰や記録的な円安・・・と厳しい状況が続いています。最も困難な地域の人々にとって、支援が途切れず続くことが心の支えになり希望をつなぎます。みなさまからの応援とご支援をよろしくお願いいたします。

「私たちに国や世界を変える力はないけれど、今自分ができることをやり続けましょう」（ラオスのパートナー NGO の Nyai さんの言葉）



モン族の子どもたち



川を渡るパコ族の子どもたち



ラオスの浄水器(水プロジェクト)



学校建設プロジェクト

2024 年 7 月現在



① コンダ小学校 レインボーライブラリー



② クーヴァン分校



③ キムソンカシトン分校
カウンセリング室/図書室



④ チュクチョン分校



⑤ ドンニヤイ小中高校図書館



⑥ チュンミン半寄宿小中学校



⑦ バンヴェン分校 レインボーライブラリー



⑧ ヴァンフー小学校 レインボー
ライブラリー



⑨ ドイホン小学校 レインボーライブラリー



⑩ ノンケー中高校図書館



⑪ ファイルーシ幼稚園



⑫ ラロ小学校

完成

ベトナム

レインボーライブラリー(図書館)コンダ小学校
株式会社ディアーズ・ブレイン

2022年に2つの分校を統合、小学生だけで360名が学ぶ地域の中心基幹校です。司書のハン先生は体育の先生で、ダンスをしてリラックスしてから読書啓もう活動を始めするなど工夫しています。写真①

ベトナム

クーヴァン分校
エルセラーン1%クラブ

タインホア省の山間部の学校です。2階建ての校舎があるものの、5年生は竹で作られた雨風が凄くない校舎で学んでいました。トイレも新たに整備され、児童の学習環境が大きく改善しました。写真②

ベトナム

カウンセリング室/図書室 キムソンカシトン分校
柏原東高等学校同窓会

柏原東高等学校(カシトン)の名前を学校名に引き継ぎ、新校舎建設に続いてカウンセリング室兼図書室施設を建設します。その施設を活用して、子どもたちの心の健康について理解を深める啓蒙活動を実施します。3月に、カシトンの関係者が訪問し交流会を開催しました。写真③

ベトナム

チュクチョン分校
匿名希望

ハノイ市から西北に154kmのイエンバイ省の山岳部にあり、子どもたちは毎日山道を通学して熱心に勉強しています。写真④

ラオス

ドンニヤイ小中高校図書館
山田浩司

2007年度以来、小・中・高校、スポーツコート、集会所、環境プロジェクトと様々なプロジェクトで一緒にしてきた学校です。念願の図書館が整備されました。写真⑤

建設中

ベトナム

ドンナム分校
一家恵理

ドンナム区域は山岳部で、点在する家々から子供たちが通う、区で唯一の学校です。築20年以上を経た校舎(教員室)は古いものの、丁寧に手入れされています。教室不足のため、教員室も教室として使用しています。不足している2教室新校舎を建設します。(引き続き、建設許可申請中)

ベトナム

チュンミン半寄宿小中学校
一家恵理

地域の5つの分校から3年生以上の児童が学ぶ拠点校で、教育の質の向上に取り組んでいる意欲的な学校です。通学が困難な生徒たちは寄宿舎に入り、食糧の確保と栄養の充実もはかっています。小学校1-5年生は8クラスあり本来8教室が必要ですが、現在は6教室しかなく、隣接する中学校を間借りしたり、多目的室を教室代わりとしています。不足している2教室を建設します。(引き続き、建設許可申請中) 写真⑥

ベトナム

**レインボーライブラリー(図書館)
バンヴェン分校/ヴァンフー小学校**
一般社団法人ゼブラ社会貢献支援協会 (ZESCO)

両校とも、教室数は充足しているものの読書のための設備は整っていません。少数民族児童が多く学ぶ学校で、本を読む環境を整え読書啓蒙活動を実施することは言葉の学習にも大変役立ちます。先生方も読書教育に強い意欲をもっています。(引き続き、建設許可申請中) 写真⑦⑧

ベトナム

**レインボーライブラリー(図書館)
ドイホン小学校/ティエンタン小学校**
エルセラーン1%クラブ

両校とも、バクザン省イエンテー郡にある学校です。CSDのレインボーライブラリーの活動の評判を知り、参加したいと手を挙げた地域です。先生方は読書教育に強い意欲をもっています。(建設許可申請中) 写真⑨

ラオス

ホーコンナイ中学校図書館
エルセラーン1%クラブ

伝統舞踊の郡大会で1等、ラオス語試験では1等、2等をとるなど優秀な成績をおさめるモデル校です。更に学校を魅力的な場にしたいと先生方が努力を続けており、図書館プロジェクトはその大きな一助となります。

ラオス

ノンケー中高校図書館
エルセラーン1%クラブ

2019年にAEFAのプロジェクトでトイレ棟を支援した学校です。2024年、井戸、水タンクと浄水器も設置しました。生徒たちの学びを深めるために図書館プロジェクトを実施します。写真⑩

ラオス

ファイルーシ幼稚園
トレノケートホールディングス株式会社

これまでに小学校2棟をAEFAプロジェクトにより整備しました。先生方は協力し合い熱意をもって授業や学校活動に取り組み、スポーツも学業も成績優秀な郡のモデル校です。就学前教育の質を向上したい・・・と、小学校と同じ敷地内に幼稚園を整備します。写真⑪

ラオス

ラロ小学校
一般寄付

ベトナムとの国境に近い、小さな村の小学校です。ラロ村は山のでっぺんにあり、雨季には川が増水したり道がぬかるんだりとアクセスが難しいところですが、村の子どもたちの唯一の学び舎となります。写真⑫

スリランカ

オスウィンナ小中学校
エルセラーン1%クラブ

1994年創立時より地域の人口が増え、児童生徒数も増加。教室不足となっています。また、図書室やIT室も不足しており、子どもたちの学びを充実させるべく2教室の追加校舎を切望しています。

スリランカ

ホーリーエンジェルズ女子校
エルセラーン1%クラブ

2004年スマトラ沖地震による大津波で全壊した学校の児童生徒を救済するため、村の人々が地元のキリスト教会に懇願して建設されました。敷地スペースに限られる中、現在の校舎を2階建てに拡張し、小学生全員が学べるようにします。

支援者募集

2024 年度計画中の学校建設プロジェクト

山岳少数民族の地域を訪れて痛感するのは、教育格差の拡大です。

貧困よりも深刻な課題として直面しているのが、言語をめぐる問題です。

子どもたちにまず学びの場を届けるため、現在、学校建設にご協力いただける支援者を募集しています。

詳細は事務局にお問い合わせください。

皆さまの支援が必要な学校	支援が求められている背景・支援内容
ベトナム バンマイ小学校	タインホア省の少数民族タイ族の人々が暮らすベトナム国内の中でも厳しい貧困地域で、行政からの予算は不足しがちです。バン村の学校とお隣のマイ村の学校を統合、両村の中間地点に2つの村の子どもの学び舎を充実させます。
ベトナム サマン分校	タインホア省のラオス国境に近い山間部の脇道を入った奥地にある小さな学校です。本校からは10キロ以上離れているため、この地域の子どものための唯一教育の場です。現校舎の老朽化に伴って、同じ敷地内に新しい教室を建て替える計画です。
ベトナム ケオテー分校	モン族の子どもたちが学ぶ小さな分校です。老朽化が進み、雨漏りやタイル割れが酷く、カビも生えて不衛生な教室になってしまい、全面的な改修が必要です。トイレも新設します。
ベトナム フアブー分校	フアブーはタインホア省で最も貧困度の高い地域です。2-5年生児童は10キロ離れた本校へ通い、1年生は村の幼稚園に間借りして学んでいます。児童が地元で学べるよう、小学校校舎の新設を希望しています。
ベトナム ドンティエン小学校 レインボーライブラリー(図書館)	タイ族、ヌン族ほか少数民族の児童が学びます。今年度より2つの分校が統合され、特に1年生の児童数が倍増しました。1年生がベトナム公用語を学ぶためにも、読書の活動は重要です。
ラオス スクサムバン中高校 図書館	ACD(ラオスNGO)による教育支援プロジェクト「環境啓もう活動」で学校の環境整備や緑化に熱心に取り組みました。図書館の活動にも参加したいと切望しています。
ラオス クムノムシン小学校	1985年建設の木造校舎を、村人が年々拡張したり補修しながら使ってきました。現在の児童数は89人、教員3名で複式で授業を行っています。校舎の建て替えが必要です。
スリランカ ランミヒタンナ小中学校	貧困地域にありながら、児童生徒の学習意欲はきわめて高く、修了試験でも良い成績をおさめています。現在の校舎では教室が不足しており、一般授業は可能ですがそれ以外の活動ができない状況です。AEFAプロジェクトとして2教室の新校舎を建設します。



バンマイ小学校



サマン分校



ケオテー分校



フアブー分校



ドンティエン小学校レインボーライブラリー



スクサムバン中高校 図書館



クムノムシン小学校



ランミヒタンナ小中学校

坪井未来子の ベトナム遠景・近景②



オーシャンとの出会いから考える

今回はホットな話題をお届けします。ホーチミンで起きたある炎上騒ぎから、皆さんはどんな思いを抱かれるでしょうか。
(つばい・みきこ／ベトナム語通訳・翻訳者、AEFA 理事)

5月初旬、ホーチミンのある国際学校で、高校2年生にリストアップされた推薦図書の1冊を読んだ保護者が「怒りに手が震えた」と SNS に投稿したところ一気に炎上し、騒動となっています。問題の書籍は、ベトナム系アメリカ人の詩人で作家、オーシャン・ヴオンが書いた『地上で僕はつかの間きらめく』（日本語版あり）。ベトナム難民の男の子がアメリカで成長していく過程を「文字の読めない母への手紙」という体裁で描く自伝的小説ですが、同性愛の少年たちの描写が高校生には「度が過ぎる」、ということで侃々諤々、行政処分も発動か、という事態に。ただ、騒動のおかげで私は遅ればせながらこの作家を知ることができ、同時にすっかり魅了されてしまいました。アメリカ社会において「アジア系」で「難民」で「ゲイ」であるという多重の「マイノリティラベル」が貼られた人生を受容する過程で研ぎ澄まされた美しい言葉、静かで柔らかな語り口、深い洞察、つらい歩みも「美」ととらえようとする強さ…。あらためて、「ひとはマイノリティとなるべくして生まれてくるのではない、マイノリティになるのだ」という思いが湧いてきました。

そしてまた、「マイノリティ」とは、他者との関係でそう呼ばれる以上、だれもがその立場になる可能性があるのです。戦争などにより、一夜にしてマジョリティだった人々がマイノリティとなる、難民となる、といった事態がどれだけ繰り返されていることでしょう。



ベトナム語、英語、日本語で出版されたオーシャン著『地上で僕はつかの間きらめく』（坪井所有）

来年はベトナム戦争終結50年を迎えます。米国では、同じくベトナム系アメリカ人ヴィエト・タン・ウエンのピュリッツァー賞受賞作『シンパサイザー』がドラマ化され、大きな反響を得ています。日本では、『ドクちゃん〜フジとサクラにつなぐ愛』という映画が公開されていますが、ご縁があって私はこの映画の字幕を担当させていただきました。この映画からは、結合双生児として生まれ、生きてきたドクさんを通じ、50年経っても消えていない戦争の傷跡、ひとりひとりの人生に与える影響がずしりと伝わってきます。いまこそ、国にとっての「戦争」は終わっても人々にとっての「戦後」は続いている、ということを直視し、ベトナム戦争を様々な視点から見直す時なのかもしれません。

こうした一見「社会の少数者」の視点で描かれた作品が広く受け入れられるのは、戦争が続く世界情勢もありますが、誰もが生きづらさを感じている現代において、彼らの言葉に耳を傾けることを通し、自分の「生きづらさ」に気づき、他者の「生きづらさ」にも目を向け、共感したり理解を深めたりするきっかけとなるからではないかと思います。そういう意味では AEFA の活動にもつながるなあなどと考えながら、パートナー NGO のアインさんに「騒動になってるけど、オーシャン・ヴオン読んだ？」と聞いてみたところ、「え?! オーシャンは私の近年最大の推しですけど! AEFA の会報に書くなら私にもひとこと書かせて!」ということで、いただきました。

「2022 年、私はある新聞記事で初めて詩人オーシャン・ヴオンのことを知り、夢中で詩を読みました。彼はベトナム人で、私より一回り若い世代のアメリカ育ちですが、その物語に常に漂う世代間のトラウマと喪失感は、私にとって非常に身近に感じられるものです。この詩人を尊敬するのは、彼が数え切れないほどの逆境の只中にいても、観察し、共感し、情緒あふれる詩を書くから。私はあなたから人生を愛することを学びました、ありがとう詩人!」